

孟子の良心哲学論

—良知良能と関連して—

浅井茂紀

目次

- I 序論
- II 本論
 - 第1節 孟子の良心の創始
 - 第2節 孟子の良心と良知良能
 - 第3節 孟子の良心と四端の心
 - 第4節 孟子の良心と仁義
 - 第5節 孟子の良心と礼智
- III 結論

I 序 論

論者は、「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」と題して論説する。その目次は前記の如しである。そして、「孟子の良心哲学論」(以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する)の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと、且つ、カントの『純粋理性批判』での哲学する (philosophieren)⁽¹⁾ことや異文化であるが宗教上のイエス・キリスト (Jesus Christ) の「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」(マタイの福音書, 5—8)⁽²⁾, とあるイエスの言う「心」やキリスト教の根本的徳である愛 (agapê) の宗教, これらの認識や意識においても, この論文は, 「孟子の良心哲学論」と題して考察することも可能であると言えよう。

論者は, 「孟子の四端哲学論—心の認識と関連して—」⁽³⁾, 「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」⁽⁴⁾, 「孟子の人物哲学論—孔子と孟子の哲学を比較して—」⁽⁵⁾, などの論説でも, すでに儒教や儒学, 孟子の哲学について多少なりともリサーチ (researches) を実践してきた。そこで, 今回もそれらのシリーズ (series) として記述する。まず,

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865-A838, B866, S.752-753.

カントは, その著『純粋理性批判』で「我々は哲学を学習することができない。せいぜい哲学する (philosophieren) だけである」と記述している。

つまり, 哲学する (philosophieren) とは, ある問題に対して, 真知 (epistêmê) の獲得のため実際に自ら哲学的に思考することであろう。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書, *The New Testament*』(英和対照) 日本聖書刊行会, 昭和52年, 9ページ。

“Blessed are the pure in heart, for they shall see God. (Matthew, Chapter 5-8).”

- (3) 拙稿「孟子の四端哲学論—心の認識と関連して—」(論説)『千葉商大紀要』第40巻第1号, 千葉商科大学国府台学会, 2002(平成14)年6月30日発行, 27-40ページ。
- (4) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」(論説)『千葉商大紀要』第38巻第2・第3合併号, 2000(平成12)年12月31日発行, 57-74ページ。
- (5) 拙稿「孟子の人物哲学論—孔子と孟子の哲学を比較して—」(論説)『千葉商大紀要』第36巻第1号, 1998(平成10)年6月30日発行, 1-24ページ, 等。

1. 中国の戦国時代において、孟子（372-289B. C.）が、「良心」の熟語を最初に使用したのではなかろうか、ということの問題にして、その根拠と内容を説明する。また、現今、自己自身において、何が善であり悪であるかを知的認識し、善を命じて悪を退ける個人の道德意識でもある、この「良心」（Conscience）の言葉は、哲学、道德や倫理学上などの学術用語としても重要であり、相当な価値があろう。

さらに、「良心」（Conscience）の概念は、「人間のあり方」として、世界の人々の精神や心の問題と関係するであろう。次に、

2. 孟子の哲学における本体である良心、仁義と良知良能のかかわりを問題にする。

3. 性善説の孟子では、「心」には、仁義礼智の四端の心と仁義礼智の四徳とが配慮されていることや、それら四端や四徳は、人間が内部的に固有していることを説明する。

4. 孟子の仁は、人の心である。孟子の義は、人の路である。これら、孟子の仁や義、仁義と良心の問題を取り上げて考察する。

5. 孟子の礼は、辞讓の心であり、恭敬の心でもある。孟子の智は、是非の心である。これら、孟子の礼や智、礼智と良心の問題を取り上げてみる。

かくして、論者は、これら性善説の孟子の良心の創始、良心と良知良能や四端の心、仁義礼智などの理念（Idee）や哲学（Philosophy）を問題にし、且つ、分析や総合して、全体的にシステムタイズ（systematize）し、それらの価値と意義を考察してみたい、と思うのである。

次に、Ⅱ 本論 第1節 孟子の良心の創始から説明する。

Ⅱ 本 論

第1節 孟子の良心の創始

中国の戦国時代、性善説の孟子が、「良心」の漢字・熟語を最初に使用したと思われる。このことは、次の『孟子』告子上節の出典が根拠である。「良心」の語源でもある。

□□人に存する者と雖も、豈仁義の心無からんや。其の、其の良心を放する所以の

者、亦猶斧斤の木に於けるがごときなり。(告子上), (傍点筆者)⁽⁶⁾。

孟子は、人の心に存在するものについて考えてみても、どうしてそこに仁義の心が無かろうか、必ず仁義の心はある。ただその、人がその良心(仁義の心)を放ち失うわけは、やはりまた、なお丁度、斧斤、すなわち、斧や斤が美しい牛山(斉国の東南の山)の木を伐採し無くしてしまったのと同じなのである⁽⁷⁾。

この告子上節によって、孟子が、「良心」の熟語を使用したことが判明する。しかし、『孟子』書の全七篇において、ここの告子上節だけに記載されている、この「良心」の熟語が唯一無二のものである。つまり、亜聖・孟子が、この「良心」の漢字・熟語を最初に使用したと言うことは、孟子が、「良心」の創始者である、と論者は考えるのである。「良心」の言葉は、孟子の独創である。この「良心」の熟語は、孔子の『論語』はもとより、『大学』や『中庸』には無いのである⁽⁸⁾。

次に、この告子上節では、孟子は、人間の心には、必ず仁義の心があるとしている。その仁義の心が、良心でもある。そこで、仁義の心が、全く良心と同じであるか、どうか問題になる。数学的な集合論によれば、両者は、重なる所と重ならな

(6) 雖存乎人者、豈無仁義之心哉。其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也。(告子上), (傍点筆者)。「良心」の熟語が、『孟子』全篇中唯一記載されている節である。宋朱子(朱熹)集註『四書集註』香港太平書局、1964年、孟子、卷6、164ページ。宋朱子(朱熹)集注『四書集注』台湾中華書局、中華民國66年、孟子、卷6、7ページ。

慧豐學會『漢文大系』(一)(大學說、中庸說、論語集說、孟子定本)、新文豐出版公司、中華民國83年、孟子定本、卷11、14ページ。四部叢刊經部。『漢文大系』壹(大學說、中庸說、論語集說、孟子定本)、富山房、明治43年、孟子定本、卷11、告子章句上、14ページ。

引得編纂處(洪業、他)『孟子引得』(A Concordance to Mêng Tzǔ)附標校經文、Harvard-Yenching Institute Sinological Index Series, Supplement No. 17, Copyright 1966 in the Republic of China, Harvard-Yenching Institute, p. 44, p. 62.

Foreword by Glen W. Baxter (Associate Director, Harvard-Yenching Institute).

(7) 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系、第4卷)明治書院、昭和37年、393ページ。
(8) この「良心」の熟語は、四書の中では、『孟子』書だけに記載されていて、他の『論語』、『大学』、『中庸』には見当たらない。『孟子』書には、「良」についての漢字は、例えば、「孟子曰、存乎人者、莫良於降子。」(離婁上)、この節における良とか、良貴、良工、良人、良臣などが存在する。『論語』では、「子貢曰、夫子温良恭儉讓、以得之。」(学而1)の温良の漢字位である。従って、「学校」や「教育」だけでなく、この「良心」という漢字・熟語は亜聖・孟子の独創(originality)と言えるのである。

い所もある、と思われる。なぜならば、仁義の心は、良心に違いないが、良心は、仁義の心だけとは言い切れない。特に、孟子は、良心の具体的な一例として、仁義の心を挙げ、意識 (consciousness) して、引合いに出したと思われるのである。

人間の本性として、人間の心には、本質的に良心があり、固有している。この良心は、悪ではなくして、善である。この理由でも、孟子は、性善説である⁽⁹⁾。これが、倫理や道徳論の根幹でもある⁽¹⁰⁾。また、この孟子の創始した「良心」の言葉が、現今の哲学、倫理学、道徳哲学や心理学などの「良心」という概念に発展、応用されたのである。

従って、哲学⁽¹¹⁾、倫理学⁽¹²⁾、道徳哲学や道徳教育⁽¹³⁾、心理学、商学、経済、経営や法学など学問上の世界では、「良心」(Conscience; Proper goodness of mind; Moral consciousness; Gewissen; syneidêsis; conscientia)⁽¹⁴⁾は重要な概念である。

中国・戦国時代の孟子は、今世紀のモラルや倫理学の世界を敢えて予見したわけでもなかろうが、結果的に、今日、この「良心」の概念は、哲学、道徳や倫理学、法学などにおける学術用語の一つでもある。つまり、この「良心」の観念は、世界中の人々において普遍的な価値がある。

ゆえに、論者は、中国・戦国時代において、垂聖・孟子が、この「良心」の漢字・熟語を最初に使用したと思う。孟子が、「良心」の創始者であると論者は考えるのである。今日の「良心」の語源でもある。さらに、この「良心」の内容を開拓して

(9) 拙著『孟子の性善説と仁義』高文堂出版社、1980(昭和55)年2月20日、7ページ。

(10) 市川本太郎『孟子之総合的研究』市川先生記念会、昭和49年4月、159ページ。

(11) 注(3)参照。拙稿、前掲論文(「孟子の四端哲学論—心の認識と関連して—」)31、32ページ。また、拙著『哲学の原理』[改訂版]高文堂出版社、1987(昭和62)年7月7日、23ページ。

(12) 拙著『倫理学の語源』高文堂出版社、1978(昭和53)年5月20日、2版、9、且つ、207ページ。また、拙著『倫理学要論(1)—孟子とソクラテス—』高文堂出版社、1985(昭和60)年4月25日、153ページ。

(13) 拙著『人間の理念と政治哲学』(共著)高文堂出版社、1995(平成7)年4月5日、26、124ページ。なお、当初、日本における「哲学」や「道徳」の訳語などは、西周(1829-1897、文政12-明治30年)による。

(14) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIOUS*, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, *THE WORKS OF MENCIOUS*, p. 408. レッグは、この「良心」を“proper goodness of mind”と訳している。

倫理学や道徳哲学的根拠を提示したとも言えよう。その意義と価値は多大であろう。

また、実際、現今この「良心」(Conscience; Gewissen; conscience moral; conscientia)の言葉や言語、概念や観念は、哲学、道徳や倫理学、心理学上の学術用語などに止どまらず、世界的に普遍的な価値が存在するのである。

第2節 孟子の良心と良知良能

孟子の哲学において、良心と関係し、良心の意義を具体化したものとして、良知良能の言葉が存在すると言えよう。

□□孟子曰く、人の學ばずして能くする所の者は、其の良能なり。慮らずして知る所の者は、其の良知なり。孩提の童も、其の親を愛することを知らざる無し。其の長ずるに及びてや、其の兄を敬することを知らざる無し。親に親しむは仁なり。長を敬するは義なり。他無し、之を天下に達するなり、と。(尽心上)、(傍点筆者)⁽¹⁵⁾。

孟子が言うには、「人が学ばずして自然によくする所のものは、人の良能である。特別に、考慮しなくても自然に知る所のものは、人の良知である。2, 3歳の幼児でも、その親を愛することを知らない者はない。その成長するに及んでは、その兄を尊敬することを知らない者はない。親に親しむは仁である。年長者を尊敬するは義である。他には無い、ただ親に親しみ、年長者を尊敬する心、良知良能を押しひろめ、これを天下に行き渡らせばよいのである。」と⁽¹⁶⁾。このことは、

①人間が、学習しなくても自然によくする所のものは、人間の「良能」である。

②人間が、考慮しなくても自然に知る所のものは、人間の「良知」である。

具体例としては、幼児が、自分の親を愛すること(良能)であり、成長するにつれて兄を尊敬すること(良知)である。これらが、「良能良知」、すなわち、「良知良能」(the intuitive knowledge and intuitive ability)である。いわば、良知は、そ

(15) 孟子曰、人之所不學而能者、其良能也。所不慮而知者、其良知也。孩提之童、無不知愛其親也。及其長也、無不知敬其兄也。親親仁也。敬長義也。無他、達之天下也。
(尽心上)、(傍点筆者)。

(16) 注(7)参照。内野熊一郎、前掲書、453ページ。

これらの良心の知的認識による。且つ、良能は、それらの良心の能力行為による。

「良心」(Conscience)とは、一般的には、その人固有のよい心でもあり、自分の行為や行動について倫理や道徳的善悪の認識や判断をする心でもあるが、孟子では、仁義の心は良心でもある⁽¹⁷⁾。

しかし、「良心」や「良知良能」における、その良とは何か、という事も問題である。良とは、よい。善良的なもの。優れている。美しい。賢い。よく整ってよいものでもあろう。

従って、「良知良能」は、人間が生まれながら持っている善良なる自然的な知的認識能力である。すなわち、先天的(a priori)な性善なる良心の両面の一機能とも言えよう。やはり、良心が、本体であり、原理(archê)である。良知良能は本体である良心の一機能を担うものであろう。さらに、一方では、この良知良能の機能により、他方では、四端の心により、仁義などが形成されると言えよう。その良知良能の機能が、荀子の性悪説とは相違して、孟子の性善説の原因であり、根拠でもある、と思われるのである。それは、道家の老子や荘子の無為自然の発想とも相違があろう。

次に、やはり、この尽心上節にある「親に親しむは仁なり。長を敬するは義なり。」の仁や義に注目できよう。つまり、良知良能は、仁や義、いわば、仁義と関係するのである。前述の告子上節によれば、仁義の心は、良心である。

ゆえに、論者は、孟子の哲学、性善説において、生得的な本体である良心のカテゴリー(Kategorie)の中に、仁義の心があり、その仁義は、ここでは、人間が生まれながら持っている善良的なもので、自然的な知的認識能力である「良知良能」の各機能に因って発揮される、と考えるのである。

第3節 孟子の良心と四端の心

孟子の哲学(Mencius' philosophy)、倫理学(Ethics)や道徳哲学(Moral philosophy)では、良心や良知良能はもとより、本来的な心や心の徳として仁義礼智

(17) 注(6)参照。良心の出典の告子上8、参照。

の四端や四徳が挙げられる。最初、良心とも関係するその四端を問題にする。性善説の孟子は、人間の本性として「心」(the Mind) を原理として重要視している。

□□人皆、人に忍びざるの心有りと謂う所以の者は、今人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕(じゅってき)・惻隱の心有り。交を孺子の父母に内る所以に非ざるなり。譽を郷黨・朋友に要める所以に非ざるなり。其の聲を悪んで然るに非ざるなり。是によりて之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。羞惡の心無きは、人に非ざるなり。辭讓の心無きは、人に非ざるなり。是非の心無きは、人に非ざるなり。(公孫丑上)⁽¹⁸⁾。

この「忍びざるの心」も良心と言える。この節は、孟子の性善説の根拠でもある。□□惻隱の心は、仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辭讓の心は、禮の端なり。是非の心は、智の端なり。人の是の四端有るや、猶其の四體有るがごときなり。(公孫丑上)、(傍点筆者)⁽¹⁹⁾。

孟子の言う人間の心は、惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心の四心が内包されている。それらの心は、各々仁義礼智の端、いわば、芽生えや萌芽を持っている⁽²⁰⁾。

当初は、四徳としての仁義礼智の四端、すなわち、それら4つの芽生えに過ぎない。従って、神(God)ではないが、四端は生得觀念(idea innata)でもあろう。

□□惻隱の心は、人皆之有り。羞惡の心は、人皆之有り。恭敬の心は、人皆之有り。

(18) 所以謂人皆有不忍人之心者，今人乍見孺子將入於井，皆有怵惕(じゅってき)・惻隱之心。非所以内交於孺子之父母也。非所以要譽於郷黨・朋友也。非惡其聲而然也。由是觀之，無惻隱之心，非人也。無羞惡之心，非人也。無辭讓之心，非人也。無是非之心，非人也。惻隱之心，仁之端也。羞惡之心，義之端也。辭讓之心，禮之端也。是非之心，智之端也。人之有是四端也，猶其有四體也。(公孫丑上)，(傍点筆者)。

(19) 注(18)参照。惻隱之心，仁之端也。羞惡之心，義之端也。辭讓之心，禮之端也。是非之心，智之端也。人之有是四端也，猶其有四體也。(公孫丑上)，(傍点筆者)。

(20) 端については、趙岐は端首説である。趙注では、この「端」を「端者首也。人皆有仁義禮智之首。可引用。」として、この「首」を、はじめの意味としている。朱子は端緒説である。朱子は、「端，緒也」として、いとぐちに解釈している。さらに、伊藤仁齋は端本説である。「端は本也」(『孟子古義』)としているが、しかし、ここでは、それよりも芽生え、萌芽の意味が適当と思われる。注(7)参照。内野熊一郎、前掲書、112ページ。この書の内野博士の語釈では、「四端=四徳のめばえ、萌芽。」と記述している。

是非の心は、人皆之有り。惻隱の心は、仁なり。羞惡の心は、義なり。恭敬の心は、禮なり。是非の心は、智なり。(告子上)⁽²¹⁾。

先の仁義禮智の四端は、生長して、各々の仁義禮智の四徳となる。もとより、その四端は、經驗的にも成長、発展して、その四徳となるわけである。先の節(公孫丑上)の「辞讓の心」は、この節(告子上)では、「恭敬の心」に展開されている。つまり、孟子の言う本来的な「心」(the Mind)は、①惻隱の心、②羞惡の心、③辞讓の心(或いは、恭敬の心)、④是非の心が内包され配慮されている。これら忍びざるの心、四端の心や四徳の心は、良心の発現と中身が実在している。続けて、□□仁義禮智は、外由り我を鑠するに非ざるなり。我之を固有するなり。(告子上)、(傍点筆者)⁽²²⁾。

孟子は、心の中の四徳の仁義禮智は、外部的な鑠、すなわち、光輝なメッキではなく、内部的に人間が固有しているもの、生得原理としている。

また、孟子は、君子の性⁽²³⁾、つまり、君子の本性とは何か、ということにも言及して、それは仁義禮智であり、それらは心に根ざしたものとしている。けれども、論者は、君子だけでなく、一般の人々も心の根本、頭腦の根幹に四徳の仁義禮智(benevolence, righteousness, propriety, knowledge)の芽生えを内包している、と思考するのである。

ゆえに、性善説の孟子では、良心や良知良能の中身の実在はもとより、本来的な「心」(the Mind)としては、忍びざるの心や惻隱の心、羞惡の心、辞讓の心、是非の心である仁義禮智の四端(芽生え)の心がある。

さらに、孟子では、心の徳としては、惻隱の心、羞惡の心、恭敬の心、是非の心である仁義禮智の四徳が挙げられる。それら四徳は人間が心の内部に固有しているものなどとしていると、論者は考えるのである。

(21) 惻隱之心，人皆有之。羞惡之心，人皆有之。恭敬之心，人皆有之。是非之心，人皆有之。惻隱之心，仁也。羞惡之心，義也。恭敬之心，禮也。是非之心，智也。(告子上)，(傍点筆者)。注(3)参照。拙稿，前掲論文(「孟子の四端哲学論」)，31ページ。

(22) 仁義禮智，非由外鑠我也。我固有之也。(告子上)，(傍点筆者)。

(23) 君子所性，仁義禮智，根於心。(尽心上)，(傍点筆者)。

第4節 孟子の良心と仁義

孟子の良心と仁義、仁（惻隱の心）や義（羞惡の心）などについて問題にしてみる。

□□孟子梁の惠王に見ゆ。王曰く、叟、千里を遠しとせずして來たる。亦將に以て吾が國を利する有らんとするか、と。孟子對えて曰く、王何ぞ必ずしも利と曰わん。亦仁義有るのみ。(梁惠王上)，(傍点筆者)⁽²⁴⁾。

聖・孟子が「仁義」の熟語を創始した。

□□孟子曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。(告子上)，(傍点筆者)⁽²⁵⁾。

孟子が言う、仁は人の心である。仁は人の心に本来からあるもの、人の本心である。義は人の踏むべき正路である。それらは、惻隱の心や羞惡の心などでもある。

□□惻隱の心は、仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辭讓の心は、禮の端なり。是非の心は、智の端なり。(公孫丑上)，(傍点筆者)⁽²⁶⁾。

孟子の言う「心」は、惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心の四心が内包されていて、各々仁義礼智の端、いわば、芽生え、萌芽を持っている。惻隱の心とは、切実に深くあわれみ痛ましく思う心である。羞惡の心とは、不義不正を恥じ憎む心である⁽²⁷⁾。

これらは良心でもあり、良知良能でもある。さらに、仁義礼智の四徳が記述されている。

□□惻隱の心は、仁なり。羞惡の心は、義なり。恭敬の心は、禮なり。是非の心は、

(24) 孟子見梁惠王。王曰、叟、不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。孟子對曰、王何必曰利。亦有仁義而已矣。(梁惠王上)。(傍点筆者)。

孟子は、なぜ仁義や良心を主張したか、というと、このように中国の戦国時代、戦国七雄（齊、楚、燕、韓、魏、趙、秦）の諸侯達が自国の富国強兵策に奔走して、人民達の多数の餓死者、悲惨や苦勞などを全然顧みなかったことにも原因とその理由があったと思われる。

(25) 孟子曰、仁、人心也。義、人路也。(告子上)。

(26) 注(18)、注(19)参照。

(27) 羞惡の心とは、自分の不善を恥じ、他人の不善、すなわち、悪を憎む心でもある。

智なり。(告子上), (傍点筆者)⁽²⁸⁾。

前述した如く, 孟子では, 仁義の心は良心である。

□□孟子曰く, 仁の實は, 親に事えること是なり。義の實は, 兄に従うこと是なり。
(離婁上)⁽²⁹⁾。

□□親に親しむは仁なり。長を敬するは義なり。(尽心上)⁽³⁰⁾。

孟子は, 両親に親しむことが仁であり, 年長者を尊敬することが義であると配慮した。

□□仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。(離婁上), (傍点筆者)⁽³¹⁾。

仁は人の安宅, すなわち, 安住の家である。義は人の正しい行路である。

□□孟子曰く, 人皆忍びざる所有り。之を其の忍ぶ所に達するは, 仁なり。(尽心下)⁽³²⁾。

本性的に, 人間は皆, 気の毒で見ていられない心がある。その惻隱の心の推及が仁であり常に大事である。従って, この忍びざる心や惻隱の心は良心とも言えよう。

□□罪無くして死地に就くが若(ごと)くなるに忍びず。(梁惠王上)⁽³³⁾。

斉国の王は, 一頭の牛が, 恐れおののきながら, 罪もないのに死地に引かれていく様子を見るに忍びなかったという話であり, 孟子も, それ自体は忍びずと非常に共感(sympathy)している。

□□君子の禽獸に於けるや, 其の生を見ては, 其の死を見るに忍びず。其の聲を聞きては, 其の肉を食うに忍びず。是を以て君子は庖廚を遠ざけるなり, と。(梁惠王上)⁽³⁴⁾。禽獸とは, 鳥と獸の意味である。

(28) 注(21)参照。拙稿「孟子の良心と仁義について」『学と文芸』96集, 学と文芸会, 平成15年5月1日, 38ページ。

(29) 孟子曰, 仁之實, 事親是也。義之實, 從兄是也。智之實, 知斯二者弗去是也。禮之實, 節文斯二者是也。樂之實, 樂斯二者。(離婁上)。

(30) この「親親, 仁」の文章は告子下3と尽心上15の2箇所に記載が存在する。

(31) 仁人之安宅也。義人之正路也。(離婁上)。

(32) 孟子曰, 人皆有所不忍。達之於其所忍, 仁也。人皆有所不爲。達之於其所爲, 義也。(尽心下), (傍点筆者)。

(33) 王曰, 然。誠有百姓者。齊國雖褊小, 吾何愛一牛。即不忍其觳觫(こくそく), 若無罪而就死地。故以羊易之也。(梁惠王上)。

(34) 曰, 無傷也。是乃仁術也。見牛未見羊也。君子之於禽獸也, 見其生, 不忍見其死。聞其聲, 不忍食其肉。是以君子遠庖廚也。(梁惠王上), (傍点筆者)。

人間は、全て惻隱の心や忍びない心、慈悲 (mercy) の心や哀れみが大事である。

ゆえに、性善説の孟子の仁は、人の心、本心である。本来的な心に惻隱の心、羞惡の心、辞讓 (恭敬) の心、是非の心という四心、四徳がある。その惻隱の心が仁の端であり、仁の徳である。人は仁を固有して、その惻隱の心の推及も仁であり大事である。仁の実、切実は、親に事え、親を親愛することも仁の基本で、仁は、人の安宅などの意義である。

孟子の義は、人の踏むべき正しい路である。羞惡の心は、義の端であり、義の徳である。年長者を尊敬することなどの意義である。

論者は、孟子の良心や良知良能は、これら仁義と深い関連があり、孟子の哲学、観念では、仁義の心は良心である、と考えるのである。

第5節 孟子の良心と礼智

孟子の良心と礼智、礼 (辞讓の心) や智 (是非の心) について問題にしてみる。

□□孟子曰く、仁の實は、親に事えること是なり。義の實は、兄に従うこと是なり。智の實は、斯の二者を知って去らざること是なり。禮の實は、斯の二者を節文すること是なり。(離婁上)、(傍点筆者)⁽³⁵⁾。

礼の実、切実は、この二者、つまり、「親に事え、兄に従う」という二つの道を節文することである。節文とは、物事を程良くして、「あや」があるようにする。人間が仁義を実行する際、過不及の無い、中庸を得て、「あや」の如く美的に裝飾するのが礼である。礼は、仁義に拠る人間の行為を礼儀作法で美化する事である。

智の実、切実は、仁義の実を良く知って、我が身から去らせないようにし、自己自身で体得することである。

孟子は、良心や良知良能はもとより、仁義やこの礼智にも良く配慮して、価値を置いていると思われるのである。

□□夫れ義は路なり。禮は門なり。惟君子は能く是の路に由り、是の門を出入す。

(万章下)。(傍点筆者)⁽³⁶⁾。

(35) 注(29)参照。離婁上27、参照。

(36) 夫義路也。禮門也。惟君子能由是路，出入是門也。(万章下)。

孟子は、義を道路に譬え、礼を装飾的で実用的な門に譬えている。

さらに、堯聖・孟子は、聖人君子・孔子の言葉を引用して、智についても記述している。

□□孔子曰く、仁に里るを美と爲す。擇んで仁に處らずんば、焉んぞ智たることを得ん、と。夫れ仁は、天の尊爵なり。人の安宅なり。(公孫丑上)。(傍点筆者)⁽³⁷⁾。

孔子が言う、「人は仁徳に居ることが、美的で立派な事である。自分で選択して仁徳に居らないならば、どうして智のある人となることが出来ようか。云々。」と。

□□惻隱の心は、仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辭讓の心は、禮の端なり。是非の心は、智の端なり。(公孫丑上)。(傍点筆者)⁽³⁸⁾。

□□惻隱の心は、仁なり。羞惡の心は、義なり。恭敬の心は、禮なり。是非の心は、智なり。(告子上)。(傍点筆者)⁽³⁹⁾。

孟子の仁義礼智において、この両節(公孫丑上と告子上)の記載では、仁義智の三徳は一致するが、なぜかこの礼だけが文章に相違がある。「辭讓の心」と「恭敬の心」と如何なる相違があるかが問題でもある。

①「辭讓の心」は、自分がこれを辞退して他人に讓る心である。

②「恭敬の心」は、我が身をうやうやしく慎みて他人を尊敬する心である。

両方の意味は相違する。心理的に區別したのに過ぎないというよりも、「辭讓の心」は、礼の萌芽の段階であり、「恭敬の心」は、礼の盛徳の段階という意義も考慮されよう⁽⁴⁰⁾。

(37) 孔子曰、里仁爲美。擇不處仁、焉得智。夫仁、天之尊爵也。人之安宅也。(公孫丑上)。(傍点筆者)。

(38) 注(18)、注(19)参照。

(39) 注(21)参照。

(40) 拙稿「孟子の道德哲学論—四徳論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第37巻第1号、千葉商科大学国府台学会、1999(平成11)年6月30日発行、233-240ページ。さらに、拙著『孟子の礼知と王道論』高文堂出版社、1982(昭和57)年4月25日、9、且つ、37ページ。また、注(10)参照。市川本太郎、前掲書、辭讓之心の項。172ページ。

ところで、現実の世では、人間の良心や善に対しての無関心、良心の消失、悪の発生や犯罪事件、内乱や戦争などの問題もあるが、荀子の性悪説と相違して、荀子より先に中国戦国時代において、孟子は、性善説が根本原理であったがゆえ、放心よりも「良心」の存心に価値の比重を置いたと言えよう。

本来的に、この礼も仁義智と同様に人間の心に固有のものである。

従って、人間の心は、良心や良知良能を根幹として、仁義礼智も存在する。

ゆえに、性善説の孟子の礼においては、辞讓の心は、礼の端、芽生えであり、恭敬の心は、礼の徳である。礼の実、切実は、仁義の実を節文する。中庸を得て「あや」の如く美的装飾化する。礼は仁義に拠る人間の行為を礼儀作法で美化することである。義を道路に譬えれば、礼は門のようなものである。

孟子の智では、是非の心は、智の端、芽生えであり、智の徳である。智の実、切実は、仁義の実を良く知って、我が身から去らせないようにし、体得することなどである。前述の仁義の心は、良心であったわけであるからして、仁義礼智の連関などからしても、礼智の心も良心である、と言えよう。

論者は、亜聖・孟子の哲学⁽⁴¹⁾では、良心や良知良能は、これら礼智を包含した四徳の仁義礼智と密接に機能し深く関連している、と考えるのである。

Ⅲ 結 論 (孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—)

論者のこの論説、「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」における結論としては、次のようになる。まず、第1節から第5節の各節について、

[1] 孟子の良心の創始では、論者は、中国・戦国時代、亜聖・孟子が、この「良心」の漢字・熟語を最初に使用したと思う。孟子が、「良心」の創始者であると考えるのである。今日の「良心」の語源でもある。それは、次の告子上節が明確な根拠である。

□□人に存する者と雖も、豈仁義の心無からんや。其の、其の良心を放する所以の

(41) 拙著『哲学要論』、高文堂出版社、2002（平成14）年4月1日、181ページ。

並びに、拙著『教育哲学要論』、高文堂出版社、2002（平成14）年4月1日、33, 56, 96ページ。また、西洋哲学に関しては、拙著『西洋哲学史』（共著）、高文堂出版社、平成12年3月25日増補5刷発行、9ページ。拙稿「アダム・スミス (Adam Smith) —『国富論』(The Wealth of Nations) と生涯 (His Life) について—」『学と文芸』93集、学と文芸会、平成14年8月1日、71ページ。拙稿「マルクス (Karl Marx) —『資本論』(Das Kapital) と生涯 (His Life) について—」『学と文芸』94集、学と文芸会、平成14年11月1日、21ページ、等参照。

者、亦猶斧斤の木に於けるがごときなり。(告子上)。(傍点筆者)⁽⁴²⁾。

さらに、この「良心」の内容を開拓して、倫理学や道德哲学的根拠を提示したとも言える。その意義と価値は多大であろう。

また、現今、この「良心」(Conscience; Gewissen)の言葉や言語、概念や観念は、哲学、道德や倫理学、心理学上の學術用語などはもとより、世界的にも普遍的な価値が存在するのである。

[2] 孟子の良心と良知良能では、孟子の哲学、性善説において、本体である良心のカテゴリー (Kategorie) の中に、仁義の心があり、仁義は、ここでは、人間が生まれながら持っている、良能と良知、善良なる自然的な知的認識能力である「良知良能」(the intuitive knowledge and intuitive ability)の各機能に因って形成されるのである。

[3] 孟子の良心と四端の心では、性善説の孟子においては、良心や良知良能の存在はもとより、根本的な「心」(the Mind)として、忍びざるの心や惻隱の心、羞惡の心、辞讓の心、是非の心である仁義礼智の四端(芽生え)の心がある。

さらに、心の徳としては、惻隱の心、羞惡の心、恭敬の心、是非の心である仁義礼智の四徳が挙げられる。それら四徳は、人間が心の内部に固有しているもの、などと考慮されているのである。

[4] 孟子の良心と仁義では、性善説の孟子の仁は、人の心、本心である。本来的な心に惻隱の心、羞惡の心、辞讓の心、是非の心という四心、4種類がある。その惻隱の心が仁の端であり、仁の徳である。人は仁を固有している。その惻隱の心の推及も仁であり、大事である。仁の実、切實は、親につかえ、親を親愛することも仁の基本で、仁は、人の安宅などの意義である。

さらに、孟子の義は、人の踏むべき正しい路である。羞惡の心は、義の端であり、義の徳である。兄に従い、目上年長者を尊敬する事などの意義である。

論者は、孟子の良心や良知良能などは、これら仁義と深い関連があり、孟子の哲学、観念では、仁義の心は良心でもある、と考えるのである。

[5] 孟子の良心と礼智では、性善説の孟子の礼においては、辞讓の心は、礼の端、

(42) 注(6)参照。孟子の「良心」の存在根拠の節である。

芽生えであり、恭敬の心は、礼の徳である。礼の実、切実は、仁義の実を節文する。中庸を得て「あや」の如く美的装飾化する。つまり、礼は仁義に拠る人間の行為を礼儀作法で美化することである。義を道路に譬えれば、礼は門のようなものなどである。

また、孟子の智においては、是非の心は、智の端、芽生えであり、智の徳である。智の実、切実は、仁義の実を知って、我が身から去らせないようにし、体得することなどである。

前述において、孟子では、仁義の心は良心であったわけだから、いわば、仁義礼智の連関などからしても礼智の心も良心 (conscience; proper goodness of mind) と言えよう。

ゆえに、論者は、論理的帰納法 (logical inductive method) によれば、亜聖・孟子の哲学において、良心 (the conscience) や良知良能 (the intuitive knowledge and intuitive ability) は、これら礼智を包含した四端の心や四徳の仁義礼智 (benevolence, righteousness, propriety and knowledge) などと深く関連し、存在と価値を内包 (intension) していると考えるのである。

さらに、論者のこの論文、「孟子の良心哲学論」では、それらを分析や総合し、全体的、且つ、ロゴス (logos) 的に本文で体系化 (systematization) して、その中身を良く「哲学する」(philosophieren)⁽⁴³⁾、事を試みたのである。

よって、このような内容により、論者の「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」(Mencius' Philosophical Theory of the Conscience—In Reference to the Intuitive Knowledge and Intuitive Ability—) の論説は、三世、すなわち、過去、現在、未来に渡って、多少なりとも意義と価値があろうかと、論者は、思考するのである。

(43) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865-A838, B866, S.752-753.

宇宙の現象界で、われわれ人間が、実存的によく生きる為には、孟子の主張した「良心」や「良知良能」はもとより、さらに、良く「哲学する」(philosophieren) ことも肝要ではなかろうかと、論者は思考するのである。

[追記]

なお、論者のこの論文（孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—）は、千葉商科大学における平成15年度学術研究助成金受給による。心から深く感謝の意を表する次第である。

また、この論文は、名誉教授になられた西 昭夫先生退職記念号に論者が応募したものである。周知の如く、西 昭夫先生は、永年、本学で教授として心理学や教育心理などをご担当され、ご活躍されたのである。

斯くして、名誉教授 西 昭夫先生退職記念号に論者が応募できたことは、哲学と心理学との関連などから言っても望外の幸い、喜びである。